

ナイジェリアの 構造変化と農村変容

島田周平

1 はじめに

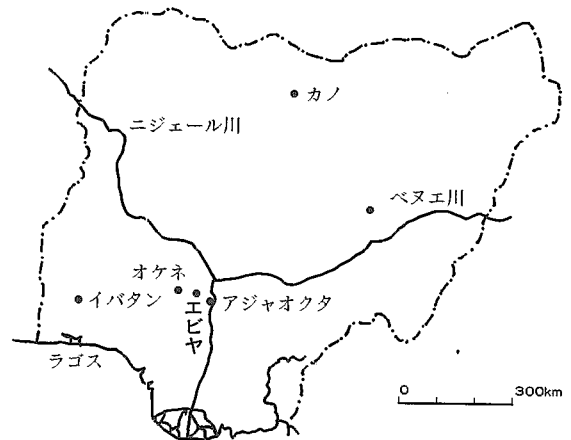
1970年代に未曾有の発展を遂げたナイジェリア経済は、80年代以降深刻な不況を経験しつつある。政府歳入の70%以上、輸出総額の80%以上を占める石油収入の減少がその原因である。総人口の70%を占めるといわれる農村地域の人々も、この急激な経済環境の変化には翻弄された。

1970年代の「オイル・ブーム」期には、都市部で未曾有の建設ラッシュが起き、都市人口は急増し、その反対に多くの農村部では若年基幹労働力が流出し、ナイジェリア版「三ちゃん農業」ともいべき現象がみられた。代表的輸出作物であるココア、落花生、パーム製品のうち、ココアの生産は停滞し、落花生、パーム製品にいたっては生産が激減した。ヤムイモをはじめとする食糧作物の生産も停滞したのは、そのためであると考えられている。

一方、1980年代の経済不況もさまざまな形で農村部に影響を与えた。ナイジェリアの通貨ナイラの切り下げ(87年)は、輸出作物の輸出競争力を高め、食糧作物も輸入食料に対して競争力を強め生産が増加するものと期待された。87年7月以降一時期、ココア生産は40年代をおもわせるようなブ

ームを経験したが、これも長続きせず、90年になって価格は急落(前年度の半額以下)した。ココアはむしろ例外で、そのほかの輸出作物生産は、現在までのところ生産復興を思わせる兆候すらみられない。食糧作物については若干の生産増加がみられたとされているが、問題はその内容であり、それについては後で述べる。また、86年に始められた構造調整計画によって、公務員と政府系企業の定員が削減され、操業率の低下が著しい外資系企業では、雇用人員削減が実施された。このフォーマル部門における従業員数の減少は、インフォーマル部門へも波及し、農村の若者たちの就業機

第1図 エビヤ村の位置



会を奪うことになった。

こうした経済環境の激しい変化のなかで、ナイジェリアの農村と農業はどのような変化を遂げつつあるのかをみるため、筆者は1985年以来、ナイジェリア中部のイグビラ人の一農村(エビヤ村)で、人々の出稼ぎや就職状況、およびそこにみられる耕作形態について調査を続けてきた。エビヤ村という農村の70年代、80年代を振り返ることによって、ナイジェリアの農村が70年代以降の激しい経済環境の変化のなかでどのような対応をしてきたのか、その結果、現在どのような問題を抱えているのか考えてみることにしたい。なおエビヤ村は、一般にミドゥル・ベルトと呼ばれているナイジェリア中部の、ニジェール川とベヌエ川との合流地点から南西約50キロメートルの地点にある。クワラ州東部の中心都市オケネと、現在、製鉄所の建設がすすめられているニジェール川沿岸の町アジャオクタをむすぶハイウェイのほぼ中間点に存在する戸数100戸あまりの小村である。

2 就業機会の変化とエビヤ村民の対応

1970年代のナイジェリア経済の急激な拡大局面では、エビヤ村の各世帯は、(1)若者たちを都市部に送り出し、(2)非農業部門の職業に就かせ、(3)彼らからの送金を基に子供たちの教育に力を入れ、拡大する非農業部門での就業者増大に努めてきた。農家世帯と非農家世帯の間では、このような離村および農業離れのスピードに差があり、しかも公務員、教員、事務員といったホワイトカラーの職種に就く比率も非農家世帯のほうが高いといった違いがみられた。しかしどの世帯でも、エビヤ村を中心基地とした「蛸足構造」を血縁関係のネットワークの上に築き、そのなかで世帯員と資金を移動させることによって、経済変化に積極的に



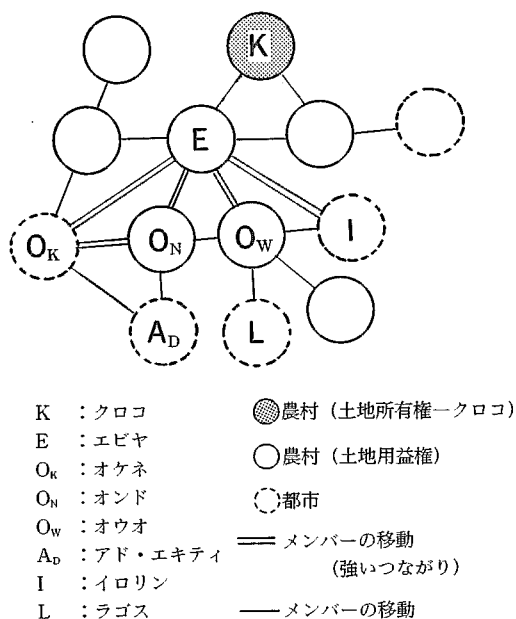
エイオバと呼ばれる年齢階梯グループが、農業共同労働の単位になることも多い。

対応しようとしていた。

1980年代のオイルドゥームとよばれる経済不況期に入ると、今度は、(1)農家「世帯」では農業従事者数が増大し、(2)非農家「世帯」の中にも農業に従事する者が出現し、(3)70年代の経済好況期に一時消滅していた徒弟が非農家「世帯」メンバーの中に復活し、(4)中高等学校卒業者で村内に滞留する者が増大する、といった変化がみられた。90年時点に村で失業中ないし徒弟として働いていた若者たちの中には中・高等学校卒業者が多数(約6割)いた。また現在村にいる失業中の若者の中では、86年以降の中学校卒業者が多数を占め、特に87年以降の卒業者の農村滞留率が高かった。

出稼ぎ者などからの世帯別送金額をみると、賃金所得者「世帯」の相対的所得減少が明らかとなった。世帯当りの送金額、現金収入ともに農家世帯の伸びが著しく、賃金所得者世帯のそれを相対的(一部絶対的)に上回っていた。1980年代の構造調整政策が、農民に相対的に有利に働いたことを裏づけるデータである。就職口のない新卒者が、村に留まる理由はここにあるのであろう。しかしながら、村に残っている若者たちは現在は畑を耕

第2図 血縁関係のネットワーク
(エビヤを頂点とした「蜘蛛構造」)



作しているが将来にわたって農業を続ける意志はもっており、非農業部門の職を求めている。彼らが、村の基幹的農業労働力となっていないことは、以下で述べる耕作形態の調査結果で明らかである。

3 エビヤ村の農業変化

激しい経済的变化に対応したこのようなエビヤ村の人々の就業構造上の変化は、当然のことながら彼らの農業にも影響を与えた。アフリカの湿潤熱帯地方で広くみられる農業は、粗放的な叢林休閒耕作から集約的定着農業まで多様であるが、総じて、乾季の木々の伐採、それに続く火入れ、耕地整理、ヤム芋の植え付け、そのほかの作物の間植・混栽、除草、収穫、そして休閒といった一連の作業によって営まれることを特徴としてきた。それは一定の耕作—休閒サイクル、作物の作付け

順序をもち、たとえば南部ナイジェリアではヤム芋の栽培を中心として農作業が体系だてられていた。しかしながらエビヤ村の耕作形態の調査結果をみると、そのような体系が大きく崩れてきている。つまり、(1)ヤム芋の栽培面積の縮小、(2)キャッサバの作付け面積の拡大、(3)作付け順序にみられるキャッサバの位置の変化、(4)畑地利用にみられる耕作—休閒サイクルの一部崩壊(耕地の弾力的運用?)、(5)共同作業の減少、といった変化が進展しているのである。これらの変化の中心にキャッサバの栽培面積拡大があることはいうまでもない。そして、このキャッサバの栽培面積増加は、キャッサバが労働粗放化に適しており、土地を選ばず、加工・貯蔵に適した作物であるという特長によって。さらに近年、改良品種キャッサバが農村部でも広く入手できるようになってきている点も大きな要因になっている。

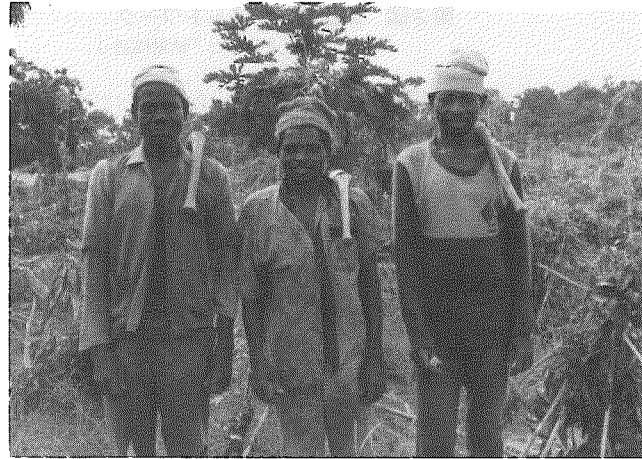
筆者は以前、1960年代までのナイジェリア南部の食料生産増大にとって、キャッサバの栽培面積拡大が重要な役割を果たしており、キャッサバの生産が将来も増大することを予想したことがある。しかし、その時に考えていたキャッサバの作付け面積拡大は、粗放的叢林休閒耕作から集約的定着農業への移行を促進するものであり、その拡大速度はもっと緩やかなものと考えていた。しかし、今日エビヤ村でみるキャッサバの栽培面積拡大は、既存の叢林休閒耕作形態の枠内に留まらない異質の耕作形態を生み出すほどの大きな変化をもたらすものである。本来南部ナイジェリアの農業は、ヤム芋を中心として経営されていた。キャッサバの生産は60年代にすでに増大しつつあったが、それでも作付け順序に占める位置は休閒に帰す直前の、いわば劣等地への作付けであった。それが現在、エビヤ村では、キャッサバの作付け順序は耕作初年度に移っており、しかも2年度以降のあら

会を奪うことになった。

こうした経済環境の激しい変化のなかで、ナイジェリアの農村と農業はどのような変化を遂げつつあるのかをみるため、筆者は1985年以来、ナイジェリア中部のイグビラ人の一農村(エビヤ村)で、人々の出稼ぎや就職状況、およびそこにみられる耕作形態について調査を続けてきた。エビヤ村という農村の70年代、80年代を振り返ることによって、ナイジェリアの農村が70年代以降の激しい経済環境の変化のなかでどのような対応をしてきたのか、その結果、現在どのような問題を抱えているのか考えてみることにしたい。なおエビヤ村は、一般にミドゥル・ベルトと呼ばれているナイジェリア中部の、ニジェール川とベヌエ川との合流地点から南西約50キロメートルの地点にある。クワラ州東部の中心都市オケネと、現在、製鉄所の建設がすすめられているニジェール川沿岸の町アジャオクタをむすぶハイウェイのほぼ中間点に存在する戸数100戸あまりの小村である。

2 就業機会の変化とエビヤ村民の対応

1970年代のナイジェリア経済の急激な拡大局面では、エビヤ村の各世帯は、(1)若者たちを都市部に送り出し、(2)非農業部門の職業に就かせ、(3)彼らからの送金を基に子供たちの教育に力を入れ、拡大する非農業部門での就業者増大に努めてきた。農家世帯と非農家世帯の間では、このような離村および農業離れのスピードに差があり、しかも公務員、教員、事務員といったホワイトカラーの職種に就く比率も非農家世帯のほうが高いといった違いがみられた。しかしどの世帯でも、エビヤ村を中心基地とした「蛸足構造」を血縁関係のネットワークの上に築き、そのなかで世帯員と資金を移動させることによって、経済変化に積極的に



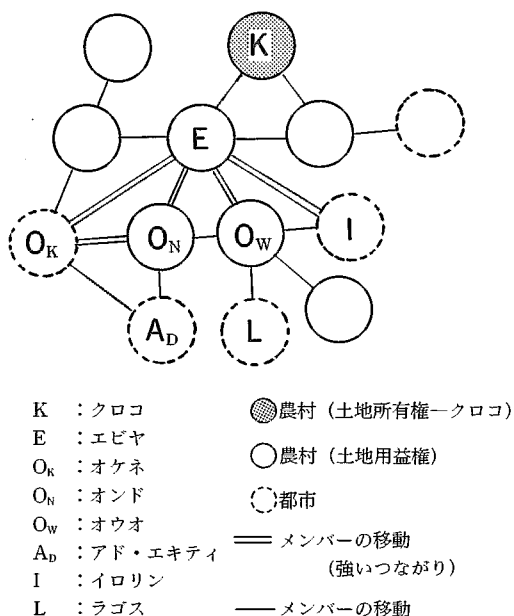
エイオバと呼ばれる年齢階梯グループが、農業共同労働の単位になることも多い。

対応しようとしていた。

1980年代のオイルドゥームとよばれる経済不況期に入ると、今度は、(1)農家「世帯」では農業従事者数が増大し、(2)非農家「世帯」の中にも農業に従事する者が出現し、(3)70年代の経済好況期に一時消滅していた徒弟が非農家「世帯」メンバーの中に復活し、(4)中高等学校卒業生で村内に滞留する者が増大する、といった変化がみられた。90年時点に村で失業中ないし徒弟として働いていた若者たちの中には中・高等学校卒業生が多数(約6割)いた。また現在村にいる失業中の若者の中では、86年以降の中学校卒業生が多数を占め、特に87年以降の卒業生の農村滞留率が高かった。

出稼ぎ者などからの世帯別送金額をみると、賃金所得者「世帯」の相対的所得減少が明らかとなった。世帯当りの送金額、現金収入ともに農家世帯の伸びが著しく、賃金所得者世帯のそれを相対的(一部絶対的)に上回っていた。1980年代の構造調整政策が、農民に相対的に有利に働いたことを裏づけるデータである。就職口のない新卒者が、村に留まる理由はここにあるのであろう。しかしながら、村に残っている若者たちは現在は畑を耕

第2図 血縁関係のネットワーク
(エビヤを頂点とした「蛸足構造」)



作しているが将来にわたって農業を続ける意志はもっておらず、非農業部門の職を求めている。彼らが、村の基幹的農業労働力となっていないことは、以下で述べる耕作形態の調査結果で明らかである。

3 エビヤ村の農業変化

激しい経済的变化に対応したこのようなエビヤ村の人々の就業構造上の変化は、当然のことながら彼らの農業にも影響を与えた。アフリカの湿潤熱帯地方で広くみられる農業は、粗放的な叢林休閒耕作から集約的定着農業まで多様であるが、総じて、乾季の木々の伐採、それに続く火入れ、耕地整理、ヤム芋の植え付け、そのほかの作物の間植・混栽、除草、収穫、そして休閒といった一連の作業によって営まれることを特徴としてきた。それは一定の耕作—休閒サイクル、作物の作付け

順序をもち、たとえば南部ナイジェリアではヤム芋の栽培を中心として農作業が体系だてられていた。しかしながらエビヤ村の耕作形態の調査結果をみると、そのような体系が大きく崩れてきている。つまり、(1)ヤム芋の栽培面積の縮小、(2)キャッサバの作付け面積の拡大、(3)作付け順序にみられるキャッサバの位置の変化、(4)畑地利用にみられる耕作—休閒サイクルの一部崩壊(耕地の弾力的運用?)、(5)共同作業の減少、といった変化が進展しているのである。これらの変化の中心にキャッサバの栽培面積拡大があることはいうまでもない。そして、このキャッサバの栽培面積増加は、キャッサバが労働粗放化に適しており、土地を選ばず、加工・貯蔵に適した作物であるという特長によって。さらに近年、改良品種キャッサバが農村部でも広く入手できるようになってきている点も大きな要因になっている。

筆者は以前、1960年代までのナイジェリア南部の食料生産増大にとって、キャッサバの栽培面積拡大が重要な役割を果たしており、キャッサバの生産が将来も増大することを予想したことがある。しかし、その時に考えていたキャッサバの作付け面積拡大は、粗放的叢林休閒耕作から集約的定着農業への移行を促進するものであり、その拡大速度はもっと緩やかなものと考えていた。しかし、今日エビヤ村でみるキャッサバの栽培面積拡大は、既存の叢林休閒耕作形態の枠内に留まらない異質の耕作形態を生み出すほどの大きな変化をもたらすものである。本来南部ナイジェリアの農業は、ヤム芋を中心として経営されていた。キャッサバの生産は60年代にすでに増大しつつあったが、それでも作付け順序に占める位置は休閒に帰す直前の、いわば劣等地への作付けであった。それが現在、エビヤ村では、キャッサバの作付け順序は耕作初年度に移っており、しかも2年度以降のあら

ゆる畑(耕作最終年の畑に限定されない)にも作付けされている。これは、ヤム芋を中心としてきた根栽型農業がキャッサバの連続的耕作によって変質してきていることを意味している。

このような変質は、耕作—休閒サイクルの乱れといった点でも観測される。耕作—休閒サイクルの乱れとは、年度別耕作地の区別の不明確化、耕作地の放棄(すなわち休閒地への組み入れ)時期の不明確化の両面でみられる。キャッサバの作付け作業はきわめて簡単であり、エビヤ村では乾季の終わりの1月と2月を除けば1年中実施されていた。これが耕作期の乱れを生み、耕作地と休閒地との区別すらも不明確にしている。このような傾向が続けば、この地方の農業はいずれ農作業暦のはっきりしない、また耕作と休閒のサイクルもはっきりしない新しい形態の「焼畑」(または休閒耕作)になるであろう。その場合の新しい形態の「焼畑」の特徴としては、(1)耕作地のshiftingからcreepingへ、(2)農作業の通年化、といった点を指摘することができよう。

4 経済変化と農業変化の関係

一国レベルの経済変動が地方の農村社会にどのような変化をもたらし、その地域の農業にどのような影響を与え、どのような変化をもたらしたのかといった問題に答えることは、簡単なようで案外難しい。それを承知でエビヤ村での調査結果を要約すれば、次のように言えるのではなからうか。

エビヤ村では、若者を中心に1970年代に向都離村が進み、農業労働力が不足がちとなった。80年代の経済不況期になると都市部のフォーマル・セクターでは人員削減が実施され、実質賃金も低下したが、村に住む若者の数も増えた。しかし、彼らは70年代のオイル・ブーム時代に強まった、農



耕作初年度のキャッサバ畑。青年が腰かけているアリ塚には、イモ泥棒を金縛りにするという呪術の棒が立ててある。

村から都市へ、農業部門から非農業部門へといった空間的・社会的移動を現在も志向しており、村の農業基幹労働力とはなっていない。彼らは潜在的失業者として村に滞留している。村の青年2人に記録してもらった1年間の農業日記をみると、彼らの農業労働時間の月別変動幅が比較的少なく、明確な農繁期が見当たらなくなってきていることがわかった。農業労働の通年均等化である。この農業労働の通年均等化は、村外に就職の機会を求めている若者にとってきわめて重要な意味をもっている。なぜなら潜在的失業者である彼らは、血縁者や友人を可能なかぎり足繁く訪問して、就職のチャンスを失わないようにする必要があり、このためには1年を通じて旅行できる自由時間の確保が必要であるからである。

この農業労働の通年均等化は、共同労働慣行(Atoopa)にも影響を与えた。1989年にエビヤ村で作物別の農業労働の主たる担い手を調査したところ、農業労働全体に占める共同労働の割合は非常に少なくなってきており、雇用労働者に依存する率よりも少なくなっていた。若者たちの農業離れが共同労働衰退の最大原因であろうが、かつて共

同労働で切り抜けていた農繁期の労働需要ピークが均等化されたことも重要な要因であろう。キャッサバは、農業労働時間の通年平均化という点でも画期的な作物であった。

ところでエビヤ村の人々は、エビヤ村を頂点とした「蛸足構造」を利用して家族を空間的・社会的に移動させ、経済変化に対応してきたと述べたが、これは当然のことながら最近新しく始まったことではない。優秀な出稼ぎ農民として名声を馳せたイグビラ人にとって、それは昔からのやり方だったのである。私が村で世話になったアウドゥ家の当主は、幼年期を近くのエガニ山麓の村で送った。彼が少年の頃両親がエビヤ村に移り住み、それ以来彼はこの村の住人となった。しかし彼は、エビヤ村ではいまだに地主から土地を借りる出稼ぎ農民である。しかしその出稼ぎ農民である彼が、

現在は彼の兄弟および子供たちの最も身近な「寄る辺」として「蛸足構造」の頂点に立っている。その彼が言うところによれば、彼が育ったエガニ山麓の村は祖先の地ではないという。彼らにとって真の祖先の地とは、オケネ近郊にあるクロコという村である。しかし、その土地は彼らにとってすでに疎遠になってきているという。彼のような例はエビヤ村で珍しくなかった。

彼らの求職活動や出稼ぎ移動をみる場合、祖先の地から遠く離れてしまった彼らの現在の境遇を考える必要があるようである。彼らが「蛸足構造」を動員して積極的に経済変化に対応している姿は、見方を変えれば、確固とした足場を失った彼らがその疎外感をエネルギーにして必死に生きている姿であるということもできる。彼らの行動は悲哀に満ちたものであるというべきかもしれない。

(しまだ・しゅうへい／立教大学文学部)